

複線径路・等至性モデルを用いた保育カンファレンスの提案

—保育者が感情共有プロセスとそのストラテジーに着目して—

*香曾我部 琢

Proposal of the childcare conference using TEM.

—Kindergarten teachers pay his attention to the emotion sharing process and its strategy.—

KOUSOKABE Taku

Abstract

In this study, kindergarten teachers perform the early childhood education conference quoting TEM(Trajectory Equifinality Model) in order to share the emotion, and kindergarten teachers clarify the process of sharing the emotion based on the language data to examine the meaning. Specifically, the methods of new early childhood education conference are shown to kindergarten teachers and the language data in the early childhood education conference performed is analyzed by focusing on sharing of emotion by SCAT(Steps for Coding and Theorization). As a result, it was shown that kindergarten teachers used four strategies during sharing emotion in new conference. And it was suggested that by using TEM for conference, kindergarten teachers considered it as an effective tool for sharing emotion and can see the narration about the social context of changes of the emotion which did not appear in video clip and the significance as tool of new hypothesis generation existed in childcare practice.

Key words : early childhood education conference, TEM, SCAT, method, share the emotion

1. 問題と目的

(1) 保育カンファレンスの現状と問題

保育カンファレンスとは

1980年代の中ごろから稲垣(1986)¹⁾や佐藤ら(1989)²⁾によって、教育実践のビデオ記録を活用し、教師や専門家が多大で複合的な知見を交流し合うことの重要性が示されてきた。このように、教育実践をもとに教師たちが互いの知見を交流させることで、実践の質を高めたり、授業を研究したりする方法は授業カンファレンスとして教育現場においてその有効性が示されてきた³⁾。とくに、保育の領域では、森上(1988)⁴⁾

によって実践研究の一つの在り方として保育カンファレンスが提唱された。

保育カンファレンスの効果と弊害

保育カンファレンスの効果として、先行研究では、同僚との知見の交流によって、多面的な子ども理解(田代, 1999)⁵⁾、保育の意味づけへの協働(田中, 2010)⁶⁾、問題意識の明確化(芦澤, 2010)、子どもへの関わり方の捉え直しと意識化(田中, 1996)などが示唆されてきた。しかし、その一方で、平山(1995)⁷⁾や柴崎ら(2011)が職位や経験年数によって話し合いが「教える-学ぶ」関係に終始している状況や、園が有する特有の文化や価値観に縛られ議論が硬直化したり、楽

* 宮城教育大学家庭科教育講座

しい雑談で終わったり、発言が無く話し合いにならなかつたりしてしまう危険性を孕んでいること（松本ら、2012）が示された。

効果的な保育カンファレンスの成立条件

そのため、保育カンファレンスで一定の効果を得るためには、いくつかの条件が必要であることが導入当初から示されてきた。森上（1988）は、それらの条件として①「正解」を求めない。②「本音」で話し合う。③先輩保育者による後輩保育者の指導の場にならない。④批判や論争をしない。⑤成長を支えあい、育ちあう保育者の姿勢。の5つを上げている。また、田代（1995）⁸⁾も、保育者同士の対等性、保育者の発言の具体性、保育実践とカンファレンスの循環性が必要であると述べている。

（2）保育カンファレンス研究の展開

保育カンファレンスのメソドロジー研究の現在

これらの条件をクリアし、より効果的な保育カンファレンスを行うために、これまで多くの研究者が保育カンファレンスの方法を実践してきた。そして、その効果を実証することで実践研究や保育者研修などの方法として体系づけられ、方法論として精緻化、精錬化が目指してきた。例えば、平林ら（2012）⁹⁾は、「子どもの育ちを見取る力」を向上させる研修として、自分が所属する園ではなく、異なる園のビデオ記録を利用し、観察分析シート（以下、OAS）を記述する「ビデオフォーラム（以下VF）」を提案した。そして、そのOASの分析結果から、4つの項目を上げて経験年数別に比較し、OASへの記述の内容や数に大きな違いが存在することを明らかにし、VFの効果を実証し、精錬化させている。ビデオ記録を用いた保育カンファレンスについては、このVF以外にも、養成校の実習実践指導における研究、養成期における資質向上を目指した研究など多数試みられている。

また、岡花（2009）¹⁰⁾は、鯨岡（2005）¹¹⁾が提唱する「エピソード記述」による保育記録を用いたカンファレンスを実施し、その特質と意義について検討を行っている。さらに、中坪ら（2009）¹²⁾は秋田ら（2010）¹³⁾が日本の園文化に合わせ、Laevers, F. (Ed.)（2005）¹⁴⁾の保育哲学に基づいて作成した『子どもの経験から振り返る保育プロセス』の評価尺度の一つである「夢中度」を用いたカンファレンスを実施してい

る。そのほかに、保育カンファレンスを外部公開（松本ら、2012）¹⁵⁾したり、外部からチェンジエージェントを入れたり（松井、2009）¹⁶⁾、園外の専門家と協働したり（久原ら、2011）¹⁷⁾する保育カンファレンスを体系づけ方法論し、それを精緻化することを目指した実践研究が進められてきた。

2. 研究目的

話し合いの状況に焦点化された先行研究

保育カンファレンスが提唱され、その効果と弊害が指摘される中、保育者の研修や実践の質的な向上を目指す方法論として、さまざまな道具や技法を用いて、保育カンファレンスの体系化、精緻化が創意工夫され進められてきた。とくに、先行研究では、保育カンファレンスの弊害を取り除き、その効果を上げることに焦点が当てられてきた。そのために、保育者一人ひとりが対等に、かつ具体的に話し合うことができる状況づくりとその効果が重点的に研究対象となってきた（松井、2009）。その結果、話し合いの内容の質的な深まりや共有化するプロセスについては研究対象とほとんどならず、先行研究では今後の課題や展望として指摘されるのみであった。

話し合いの質に焦点を当てて

そこで、本研究では、保育カンファレンスにおける保育者同士の話し合いの内容の深まりやその共有化に焦点を当てようと考えた。話し合いの自由さ、対等さ、具体性などを保証する状況に焦点を当ててきた先行研究に対して、本研究では、保育者同士の話し合いの内容の質的な深まりやその共有化が促されるような技法を取り入れることで、保育カンファレンスの新たなメソドロジーとしての提案を行う。そして、保育者の話し合いの内容の質的な変容プロセスを明らかにすることで、保育カンファレンスの新たなメソドロジーとしての特徴について検討を行う。

3. 研究方法

（1）新たな保育カンファレンスの枠組み

感情の共有化を目指した保育カンファレンス

中坪・秋田ら（2010）¹⁸⁾は、保育カンファレンスにおいて保育者の語りの感情に着目し、「感情の共有が保

育を省みる契機となる」と述べ、保育者の感情の認識と表出の語りのスタイルが幼稚園によって異なることを明らかにした。そして、他者に自己を投影する共感的な語りのスタイル、保育者が他者の感情に共感したり、自らの感情を開示したりするスタイルが保育カンファレンスを効果的に実施する上で重要であることを示唆した。そこで、本研究では“感情の共有化”に着目し、それを目指した保育カンファレンスの実践を行い、その実践における保育者の言語データを分析し、その効果について明らかにしようと考えた。

感情のプロセスを捉える複線径路・等至性モデル

前節において、保育カンファレンスの話し合いにおいて、“感情の共有化”の重要性が示された。そこで、本研究では、中坪・小川ら(2010)¹⁹⁾が人間の思考や行動、態度、感情の時間的な変化とその多様なプロセスを捉えるのに有効であると示した複線径路・等至性モデルを保育カンファレンスに用いることとした。

複線径路・等至性モデル(Trajectory Equifinality Model: 以下 TEM)とは、ヴァルシナー(Valsiner, 2001)²⁰⁾が、発達心理学・文化心理学的な観点に等至性(Equifinality)概念と複線径路(Trajectory)概念を取り入れようと創案したもので(サトウ2006)²¹⁾、人間の経験を時間的な変化と社会的・文化的な文脈との関係で捉え、その多様な径路を記述するための方法論である。ヴァルシナーは、人間の成長を開放システムとして捉えることで、人が他者や自分を取り巻く社会的な状況に応じて異なる径路を選択し、多様な径路(複線径路概念)をたどりながらも、類似した結果に辿りつくという、等至性概念を用いて、人間の成長のプロセスを記述できることを示した。つまり、TEMの等至点として保育者の感情を設定することで、そこに至るまでの感情の多様な変容の径路を可視化できるようになる。それによって、保育者同士がVTRの保育者の感情を媒介しながら保育カンファレンスにおいて互いの感情を着目し、それを共有しつつ話し合うことが可能となると考えた。

感情の変容を捉えるライフライン

ブラマー(1994)²²⁾は自らの転機に関する研究において、インタビューー自らが転機について自覚させるために、自らが暗黙的に理解している成長を視覚的にわかるような手立ての必要性を示している。そこで、本研究では、TEMだけでなく、感情の変容をさらに

視覚化し捉えることができるように、Figure 1のように、縦軸を「保育者の自尊感情」、横軸を「非可逆的時間」とした図を、インタビューイーに作成してもらい、その図を視覚的な刺激材料として保育カンファレンスを行おうと考えた。このような図を用いたインタビュー方法を「ライフ・ライン・インタビューメソッド(Life-line Interview Method: LIM)²³⁾と呼び、時間の経過が伴うインタビューーの心情の変化を捉えるのに有効であることが先行研究によって示されている(平野, 2009)²⁴⁾。

(2) 保育カンファレンスの方法とサンプリング TEM型保育カンファレンスの手続き

まず、VTRからTEM図を作成する手続きについて精査するために予備調査を実施した。予備調査を実施した結果、VTRから直接TEM図を作成する際に、1時間ほど時間が掛かったため、とくに時間を要した子どもの言動・行為の言語化について事前にVTRを文字データに起こし、切片化した資料を「チュートリアル資料(Table 1)」として準備した。

そして、まず第1段階として、保育者(学生)一人一人に①一度通してVTRを見てもらい、次に②チュートリアル資料を見ながらVTRを再度見る。その後、自分が気になった③付箋に保育者の援助の変化を書いて、時系列(横軸)に並べる。さらに、④その援助における保育者の自尊感情を想定して縦軸に並べる。

次に、第2段階として、保育者(学生)2~4名をグループにして、④それぞれが出した保育者の援助をいくつかのまとまりする。さらにここで⑤VTRを観

Table 1 チュートリアル資料

| |
|--|
| ビデオ 新規採用教員研修用資料『幼児理解にはじまる保育2: せんせい だいすき』 「お靴をとりに入れてください?」 |
| |
| 010: 先生が両手でタイヤを抑える。A 児は右手だけだが、全身で引っ張っている。A「こっちがいい」 |
| 011: 「ん、どこに運ぶ、こっち」といって片づけようとする。 |
| 012: 「こっちの水の中」といってタイヤを引っ張る。 <いつもお集まりにやって来ないケンジくん>テロップ |
| 013: 「こっちの水の中入ったら、また時間かかっちゃうよ。お風呂できるまで」ぐいぐい引っ張る A 児 |
| 014: その様子を見ていた他児が「だめ」大きな声で A 児に注意する。A 児が他児を見る。 |
| |

て、その援助のまとまりを再確認するとともに、そこの保育者の自尊感情の変化について話し合い並べる。

VTRの選定について

本研究では、保育実践における保育者の援助プロセスにおける感情の変容とその共有化に着目している。そのため、保育者の感情を読み取りやすいVTRとして、中坪・秋田ら(2010)らが用いたVTRのうち、Table 1に概略を例示した4歳児の園庭での片付け場面の事例(文科省, 2004)²⁵⁾を用いた。

(3) 分析方法

分析の手続き

本研究では、感情を共有化する保育カンファレンスの提案とその精査を目的とした検討を行う。そのため、サンプリングされたTEM図とグループでカンファレンスにおける話し合いの言語データを分析の対象とする。

本研究では、VTRの保育者がどのように感情を変容させつつ援助を行っているのか、カンファレンスに参加した保育者がどのようにその感情の変容を感じ取り、それをどのように共有していくのか、そのプロセスに着目する。中坪・秋田ら(2010)では、園によってカンファレンスにおける談話スタイルの違いが存在することが指摘されている。そのため、本研究においても、感情の共有プロセスに、保育者個人やその園のスタイルやパターンなどが存在し、それらをいくつかに類型することが可能性であると考えられる。

そこで、分析にあたっては、保育者の話し合いの言語データから、保育者たちの感情の共有していくプロセスにおいて共通に持つ概念を見出し、その相互の関係性を明示しようと考えた。そこで、大谷(2008)²⁶⁾が開発した比較的小規模の質的データに有効であり、明示的な手続きで、言語データから構成概念を紡ぎだしてストーリーラインを記述し、そこから理論(理論記述)を導き出すのに有効な研究技法であるSCAT(Steps for Coding Theorization)を用いた。

(4) 研究対象

本研究では、A県B町C幼稚園において実施した。期日は2012年7月18日、時間は、15時~16時40分。

4. 結果と考察

サンプリングの結果、4名の研究協力者からを言語データを収集し、それらをSCATで分析した。以下、その結果と考察である。

(1) 等至点の決定とそのプロセス

まず、本研究では、保育カンファレンスにおいて保育者がVTRの保育者Zが感情を変容させていったのか、等至点の決定とそのプロセスについての語りに着目し分析を行った。その結果、「幼児がVTRの保育者Zに両脇を抱えて教室に連れていかれる場面」を等至点とした。そして、その等至点に向かって保育者Zが感情を変容させていくプロセスを8つの場面で捉えていることが明らかとなった。そこで、保育者が保育者Zの感情の変容プロセスを共有する際に見られた8つの場面のTEM図とストーリーラインに基づいて考察する。

ここでは、TEM図をFigure 1に、共有する視点に関するストーリーラインをTable 2に示す。なお、構成概念については__で示した。

SCATの手続きに従って、8つの場面についての保育者の語りから得られたストーリーラインと、さらにすべてのストーリーラインをもとに3つの理論記述を導き出し、保育者たちが感情を共有化するプロセスにおいて、4つのストラテジーが存在し、それらを複合的に用いていることを明らかにした。以下、理論記述として示した4つのストラテジーとその考察である。

① 幼児と保育者の相関ストラテジー

場面iやiii、ivで見られるように、保育カンファレンスにおいて、VTRの保育者Zの感情を共有化していく際に、保育者の言動、表情だけでなく、それに対応する幼児の言動や表情についても互いが重ねて示すことで、保育者の感情について共感していく姿が見られた。例えば、場面iでは、対象児の振り回しを真に受けると、それを保育者を相関させて感情の評価を行っている。そこで、このような保育者と子どもとの相関について語り合うことで感情を共有していくストラテジーを「幼児と保育者の相関ストラテジー」とした。

② 援助の時系列確認ストラテジー

場面iとii、v、viiで見られたように、保育者Zの感情の値を決定していく際に、前後する保育者Zの援

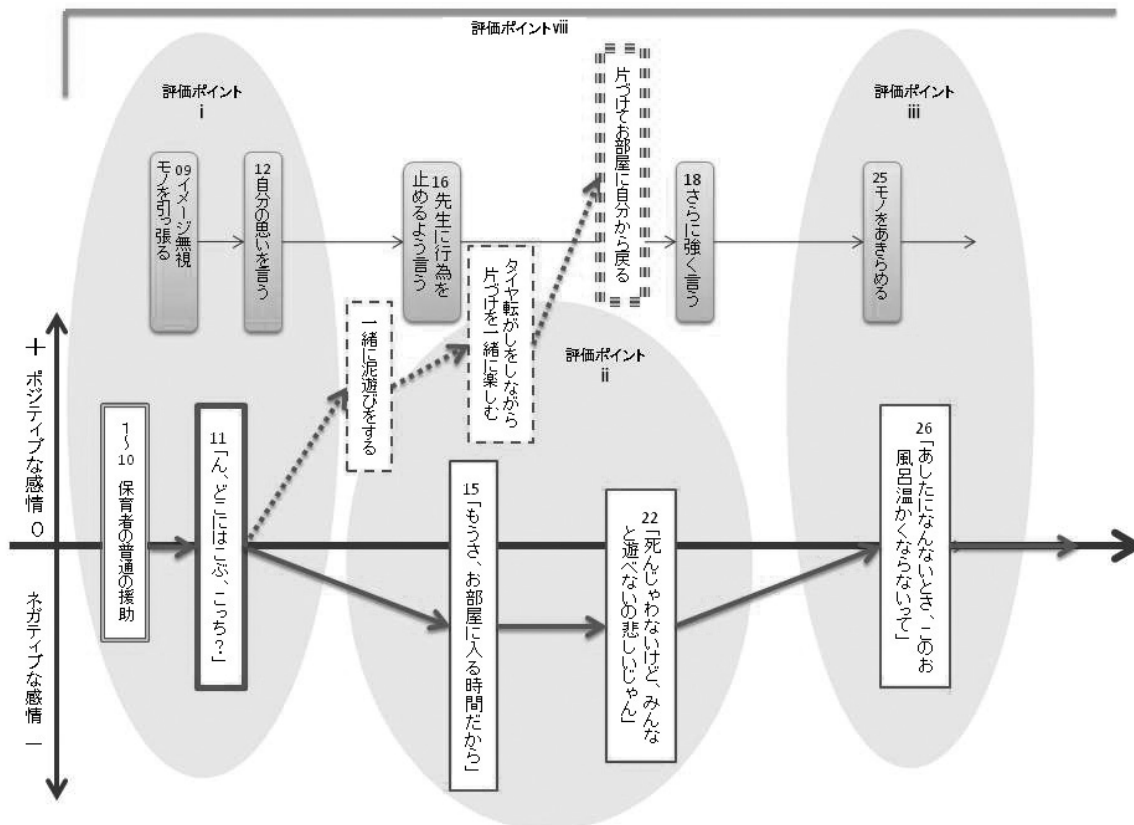


Figure 1 保育カンファレンスで作成した保育者 Z と対象児の TEM 図 前半

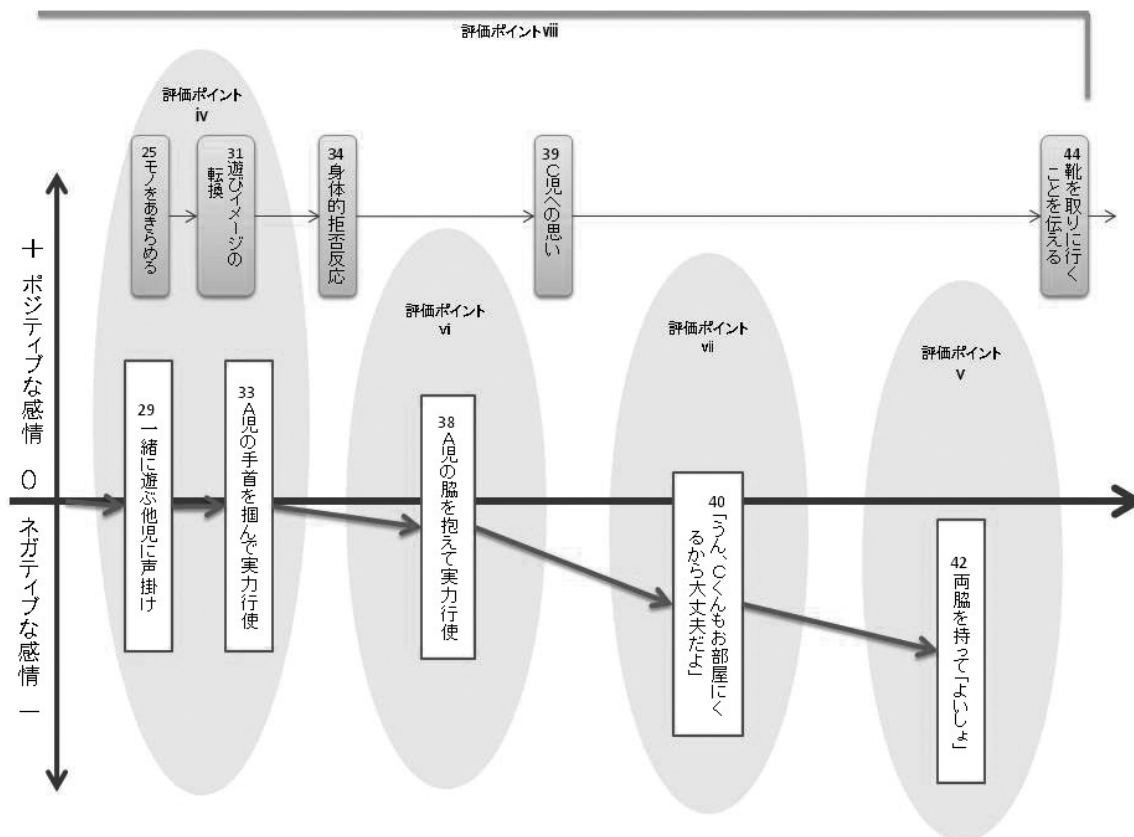


Figure 2 保育カンファレンスで作成した保育者 Z と対象児の TEM 図 後半

Table 2 8つの場面のストーリーライン

| | |
|---------|--|
| 場面 i | 保育者たちは感情評価よりも評価ポイント i の始まりの位置 (11) の重視を示した。VTR の初めから評価していく考えを示した保育者に対して、はじめの001-10までは保育者の言動の普通さを示し、10までの感情評価の不要さを示す保育者がいた。そのため、保育者は評価ポイント i (11) の確定後に、自らの経験をもとに保育者の言動の普通さと、その後に対象児の振り回し (09、12) を真に受ける保育者の意志の弱さをネガティブさと指摘し、それらを理由に当たり障りのない感情評価を行い、他の保育者も同意した。 |
| 場面 ii | 保育者たちは保育者 Z の評価ポイント ii の確認を、保育者 Z の発言 (15と22) をもとに行いつつ、保育者 Z の援助の順序確認を行いながら感情評価値の同意を得ている。その順序確認の中で、保育者が互いに保育者 Z の援助の重要性への意味づけの相違を生み出しつつ、順序確認を行い、保育者 Z が無関係な話題を対象児に行うことで、援助の気分転換を図り、片付けに気持ちが向かうよう言葉がけしている場面の感情評価を行った。 |
| 場面 iii | 保育者たちは、対象児による遊びのイメージの提案を重視し、保育者 Z の感情評価の上昇を示した。しかし、その意見に対して、保育者の一人が感情評価を下降させたことを示したが、その保育者が子どもへの感情移入によって、保育者の感情評価を間違っ捉えてしまったことを示した。その後、保育者が感情評価の確認を行い、他の保育者から上昇への支持が得られたため評価値を決定した。 |
| 場面 iv | 保育者は、保育者 Z が感情リセット術を用いたことを理由に挙げて、保育者 Z の感情評価値を真ん中評価とし、そこまでゆるやかな感情評価の上昇を示し、他の保育者に感情評価の呈示を行った。さらに、保育者たちは、後の場面とさらに後の場面について、子どもの行為から再確認を行い、評価ポイント確認を繰り返し、互いに同意した。ゆるやかな上昇に対して、一人の保育者が感情評価の連続性を示し、この場面での保育者援助の一連の流れ把握を意識することの重要性を示すことで、感情評価の現状維持を示したが、互いに評価値確認を行い最終的に現状維持に同意した。そのなかで、もう一人の保育者が先に示した保育者の評価と同評価への共感を示した。 |
| 場面 v | 保育者は他の保育者の感情評価に同意しつつ、保育者 Z の発言の重視から得た自ら葛藤しながらの評価ポイント v を示した。それに対して他の保育者は同意を示しつつ、評価ポイント v を共有し、感情評価の現状維持を決めた。さらに、その後の場面における保育者 Z の援助状況の再確認を行いつつ、自らの感情評価の提案を行い、このポイントで保育者 Z の援助方法の切り替えが行われ、強制連行的手段に移ったことが示され、その同意を形成した。 |
| 場面 vi | これまで最終的な評価ポイントについて保育者たちは話し合っていたが、この前の評価ポイントと最終的な評価ポイントの隙間において、新たな評価ポイントの提案があった。その理由として保育者の声掛けへの違和感を示し、その声掛けをした保育者の感情変容理解を述べた。この提案は、他の保育者の同意とその理由への他の保育者の共感を得て、新たな評価ポイントの決定に至った。また、この新たな評価ポイントでは、最終ポイントに向けて感情値の急激な下降が提案され、他の保育者にさらなる情報提供依頼を行いつつ、他の保育者もその急激さへの同意を示した。 |
| 場面 vii | 保育者は、保育者 Z の身体的拘束援助と提案発言による、行為と発言の矛盾を指摘し、保育者の声掛けへの違和感を深め、さらなる評価ポイントの提案を行った。提案はつづき、保育者の声掛け違和感から、保育者の感情変容理解を行い、評価ポイントの提案をし、さらにそこに情報提供依頼を行いつつ、これらの評価ポイントの連続性が保育者たちによって同意され、共有された。 |
| 場面 viii | 保育者たちは、最後に保育者 Z の感情評価全体の俯瞰を行い、変化が見られた部分における評価値の確認を他の保育者からより強い同意を得ることで、最終的な判断を行った。最終的な判断では、この事例ではポジティブな場面が無いことについて、ポジティブの意味づけの違いについて提案し、他者への志向性を持ったポジティブさが無く、自己への志向性を持ったポジティブさはあったことを示し、ポジティブの意味づけを全員で共有化することで、感情評価全体の再確認を行った。 |
| 理論的記述 | ①保育者 Z の感情について共有していく際に、保育者の言動、表情だけでなく、それと相関する幼児の言動、表情から感情の読み取りも同時に行うことで、感情を共有化していく。【 幼児と保育者の相関ストラテジー 】 ②感情の値を確定する際に、保育者 Z の援助について、その時系列を確認し合うことで、感情を共有化していく。【 援助の時系列確認ストラテジー 】 ③自分の感情の値を示すだけでなく、その理由となった情報を示すが、それと同時に他に基準となる情報が無いか依頼し、その情報とすり合わせを行いつつ感情を共有していく。【 情報提供の依頼ストラテジー 】 ④保育者たちが感情そのものの意味づけを確認し合い、評価している感情への本質的な理解を深めることで感情を共有化していく。【 感情の意味づけストラテジー 】 |

助の時系列について、保育者同士が確認し合う過程で、互いの評価を示しつつ、感情を共有していく姿が見られた。そこで、このような保育者の具体的な援助の時系列を確認しあうなかで感情を共有していくストラテジーを「援助の時系列確認ストラテジー」とした。

③情報提供の依頼ストラテジー

場面 vi と vii で見られるように、保育者が自分が決めた感情の値を他の保育者に示した際に、自分がその値にした理由を示しつつ、他に値を左右するような保育

者や幼児の言動が無い、情報提供を他の保育者に依頼するなかで、感情を共有していく様子が見られた。そこで、他の保育者に情報提供を依頼し、その提供された情報とすり合わせながら感情を共有していくストラテジーを「情報提供の依頼ストラテジー」とした。

④感情の意味づけストラテジー

場面 ii と viii で見られたように、保育者たちが保育者 Z が抱いた感情の質を理解しようと、自分達が話し合いの対象としている「感情のポジティブさ」について、

その「ポジティブ」が持つ意味について話し合うことで、感情を共有しようとする姿見られた。そこで、他の保育者と保育者Zの感情の意味づけそのものについて話し合うことで、感情を共有していくストラテジーを「感情の意味づけストラテジー」とした。

(2) 分岐点、必須通過点の決定

次に、想定した両極化した等至点「片づけてお部屋に自分から戻る」に至るための援助について、保育者たちに話し合ってもらって想定される径路について決定した。その結果、必須通過点として「1~10保育者の普通の援助」が示され、分岐点として、11の保育者とA児と一緒にタイヤを運ぶ場面が示された。そして、その後の径路として、「保育者がA児と一緒に泥遊びを楽しむ」、その後に「タイヤを転がしながら片づけと一緒に楽しむ」ことで、両極化した等至点として想定したA児が「片づけてお部屋に自分から戻る」ことが示された。以下、その語りをSCATで分析した結果得られたストーリーラインと、理論的記述である。

理論的記述に示したように、A児が自発的に片付けをして、保育室に戻るためには、まず保育者がA児と一緒に泥遊びをすることで、関係性を築くことが第1歩となることが示された。そして、カンファレンスでは、その関係性が築かれる中で生じると想定される保育者Zの感情の変容について、保育者達が共有化していく様子が示された。

Table 3 両極化した等至点に至る径路に関する語りのストーリーラインと理論的記述

| | |
|----------|---|
| ストーリーライン | 当初、保育者たちは保育者Zの言動の普通さを指摘していたが、その後に、保育者Zが対象児に対して、自らの意思の弱さを一時的に示したことが、その後の援助のぐだぐだ感を生み出した原因として示唆した。そして、保育者Zが対象児と事前に「一緒に泥遊びをすること」で、片付けと一緒に楽しめる関係づくりを構築することが重要であることを示した。そして、その関係性の構築の過程で、片づけへの消極性を示す対象児への感情変容を行い、理解の深化が必要であることを示した。 |
| 理論的記述 | <ul style="list-style-type: none"> ・対象児が片付けを自発的に行うようになるためには、保育者Zと対象児との関係性の構築が重要である。 ・関係性を構築していく過程で、対象児への理解が深化し、対象児に抱く感情を変容していく。 |

5. 総合考察

本研究の成果として、保育カンファレンスにおいて保育者が相互に感情を共有するプロセスに置いて、4つのストラテジーを用いていることが明らかにされた。それらを受けて、本章では、成果をもとにTEM型保育カンファレンスがもたらした効果について総合的に検討を行う。

仮説生成のツールとしての意義

本研究の成果から、VTRの保育者Zの感情を共有していく過程で、対象児の言動の変化について具体的な姿を示しながら、保育者の援助方法の切り換えや保育者の感情への意味づけの理由について、自分の仮説を他の保育者に示し、新しい援助の在り方について語っている姿が示された。これまでも、TEMの研究技法としての優れた点として、渡邊(2009)²⁷⁾はTEM図を作ることによって「観察されていない事実」が推測でき、TEMが「仮説生成ツール」として大きな可能性を持つことを示している。本研究の成果からも、保育者がTEM図を作成することで、保育者Zの援助の背景や子どもを理解する際の文脈について、保育者が仮説を立ててことが示され、さらに保育者の援助について新たな仮説を得る可能性が示唆された。

感情共有のツールとしての意義

また、本研究ではLIMを参照して、TEM図の縦軸として保育者Zの自尊感情の値を設定した。そのため、保育者Zの感情の変容のプロセスについて、カンファレンスに参加した保育者達の間で自らの経験を例に取りながら4つのストラテジーを用いて感情の共有化を図っていることが明らかになった。先に示したように、中坪ら(2010a)は保育カンファレンスを有効に機能させる条件として、感情を共有化すること、自らの感情を開示することを示しており、本研究の結果からも本研究で提案したTEM型保育カンファレンスの感情共有のツールとしての意義が示唆された。しかしながら、中坪ら(2010a)が示すように、感情の共有については園の特徴によってそのスタイルに違いがあることが指摘されており、今回、サンプリングを行った幼稚園がたまたま感情を共有する特徴を持っていたとも考えられる。今後は、さらにTEM型保育カンファレンスを実施する園を増やしていき、データを積み重ねていきたい。

引用文献

- 1) 稲垣忠彦 (1986) 授業を変えるために－カンファレンスのすすめ. 国土社
- 2) 佐藤学 (1989) 教室からの改革－日米の現場から. 国土社. pp.156-159
- 3) 塚野弘明 (2012) 教員養成における実践的カリキュラム開発についての研究－授業カンファレンスの導入. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 11. pp.119-126
- 4) 森上司朗 (1988) よりよい実践研究のために. 別冊発達7 乳幼児保育実践の手引き. ミネルヴァ書房. pp.244-250
- 5) 田代和美 (1999) 保育カンファレンスの有効性に関する一考察. 日本保育学会第48回大会発表論文集. pp.14-15.
- 6) 田中浩司, 田丸尚美, 高月教恵, 高橋実 (2010) 幼稚園における特別支援教育に関する研究－保育カンファレンスを中心とした支援事例の検討. 福山市立女子短期大学研究教育公開センター年報7, 29-35
- 7) 平山園子 (1995) 保育カンファレンスの有効性. 保育研究 16 (3). pp.18-29
- 8) 田代和美 (1995) 保育カンファレンスの機能についての一考察. 日本保育学会大会研究論文集48. 14-15
- 9) 平林祥・中橋美穂 (2012) ビデオフォーラムを用いた園内研修. 第3回幼児教育実践学会研究発表概要.
- 10) 岡花新一郎, 杉村伸一郎, 財満由美子, 林よし恵, 松本信吾, 上松由美子, 落合さゆり, 武内裕明, 山元隆春 (2010)「エピソード記述」を用いた保育カンファレンスに関する研究. 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要38.
- 11) 鯨岡峻 (2005)「エピソード記述」入門. 東京大学出版
- 12) 中坪史典・上松由美子・朴恩美・山元隆春・財満由美子・林よし恵・松本信吾・落合さゆり (2009) 遊びの質を高めるための保育者の援助に関する研究－幼児の「夢中度」に着目した保育カンファレンスの検討. 学部・附属学校共同研究紀要 (38), 105-110
- 13) 秋田喜代美・芦田宏・鈴木正敏・門田理世・野口隆子・箕輪潤子・淀川裕美・小田豊 (2010) 子どもの経験から振り返る保育プロセス－明日のより良い保育のために. 幼児教育映像製作委員会
- 14) Well-being and Involvement in Care Settings. A Process-oriented Self-evaluation Instrument. Kind & Genzin and RESEARCH CENTRE FOR EXPERIENTEL EDUCATION.
- 15) 松本信吾・中坪史典・杉村伸一郎・林よし恵・日切慶子, 正田るり子, 藤橋智子 (2011) 保育カンファレンスの外部公開は内部の保育者に何をもたらすのか. 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要40.
- 16) 松井剛太 (2009) 保育カンファレンスにおける保育実践の再構成－チェンジエージェントの役割と保育カンファレンス. 保育学研究47 (1). 12-21
- 17) 久原有貴・七木田敦・大野歩・松本信吾・林よし恵・田中恵子・関口道彦・落合さゆり・金子嘉秀 (2011)
- 18) 中坪史典, 秋田喜代美, 増田時枝, 安見克夫, 砂上史子, 箕輪潤子 (2010a) 保育カンファレンスにおける保育者の語りの特徴－保育者の感情の認識と表出を中心に－. 乳幼児教育学研究19. 1-10
- 19) 中坪史典・小川晶・諏訪きぬ (2010b). 高学歴・高齢出産の母親支援における保育士の感情労働のプロセス. 乳幼児教育学研究, 19, 155-166.
- 20) Valsiner, J. (2001). Comparative study of human cultural development. Madrid: Fundacion Infancia y Aprendizaje.
- 21) サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヤーン＝ヴァルシナー (2006) 複線経路・等至性モデル－人生経路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して 質的心理学研究5, 255-275.
- 22) ブラマー (1994) 人生のターニングポイント－転機をいかに乗り越えるか. 榎木満生, 森田明子訳. プレーン出版. Brammer, M, L. 1990 How to cope with Life Transitions. The Challenge of Personal Change. Hemisphere Publishing Corporation. Taylor & Francis, London
- 23) Schroots, J. J. F., ten Kate, C. A. (1989). Metaphors, aging and the life-line interview method. In Unruh, D., Livings, G. (Eds.). Current perspectives on aging and the life cycle. Vol.3: Personal history through the life course, 281-298. London: JAI.
- 24) 平野優子 (2009) 時間軸を含む病い経験把握のための参考理論と方法および概念. 聖路加看護大学紀要35. pp. 8-16
- 25) 文部科学省
- 26) 大谷尚 (2008) 4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案－着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き－. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学). 54 (2). 27-44
- 27) 渡邊芳之 (2009) 仮説生成ツールとしての TEM. サトウタツヤ編著 TEM ではじめる質的研究－時間とプロセスを扱う研究をめざして－. 誠信書房. 130-138

(平成25年9月30日受理)